

「土砂災害から命を守る」

広島県 府中町立府中中学校 3年 たきの 瀧野 ひろと 大翔

7月9日の朝、テレビをつけると各地の被害の状況が明らかとなっていた。その映像を見ていた自分は、4年前の2016年8月の朝、土砂災害が発生した現場の映像がテレビで流れていた時のことを思いだした。

そして、わずか4年後にその時の被害を上回る災害が起こるとは思いもしなかった。

自分は、4年前の災害が父の実家のすぐ近くで起きたため、土砂災害をととても身近なことに感じることが出来ていた。

しかし、土砂災害についての知識はほとんどなかったので、昨年の自由研究の研究課題にして、土砂災害が発生する原因や危険箇所などを、今住んでいる府中町を中心に調べてみた。その時に調べた土砂災害が発生する可能性の高い状況や原因等を、今回土砂災害のために大きな被害を受けた地域に当てはめてみた。するとほとんどの地域が調べた原因に当てはまった。

土砂災害が発生する危険性のある要素は大きく分けて3つある。1つ目は地質である。広島は大半のエリアが花こう岩質で、これらが長い年月をかけて風化してできた真砂土が表面に堆積している。この真砂土は非常にもろく、大雨などで崩壊する可能性が高い。2つ目は地形である。土砂災害が発生しやすい場所は山間部の溪流（小さな小川等）のある場所である。危険性の高い箇所は土砂災害警戒区域、又は土砂災害特別警戒区域に指定されている。3つ目は気象条件である。広島では平成になってから発生した土砂災害が今回で3回目であるが、いずれも連続雨量300ミリ以上、又は時間雨量80ミリ以上の短時間での集中豪雨となっている。

これらの発生原因は4年前の災害時からいろいろなところで伝えられてきたはずだが、今回の集中豪雨でも多くの被害が出る結果となってしまった。前回の土砂災害が発生してから4年程度しか経っていないのになぜ教訓に出来なかったのか。そこで、今回の豪雨災害に関するニュースや記事を見直してみた。

その中で、今回の災害で被害の大きかった矢野東の団地で被災された人のインタビューの内容が印象に残った。「ダムが完成して安心しきってしまった。考えが甘かった」と述べる。実は今年になって団地の<sup>上流</sup>に治山ダムが完成したばかりだったが、土砂はそのダムを越えて団地にまで達していた。

今回の豪雨災害のニュースや記事を見ていると、土砂災害などの被害に遭われたケースは「自分のところは」「まさかこんなことになるなんて」などといった思いから避難をしなかった、又は避難が遅れたケースが多かったのではないと思う。ただ、今回の矢野東の団地のように、治山ダムの様な目に見える形で防災対策がされれば、安心してしまふところはあっても仕方がないとも思う。

しかし、治山ダムを作る工事の前に説明会で広島県や広島市の職員の方たちが、「これで安心できるわけではありません。何かあったら必ず逃げて下さい」ということを繰り返し訴えていたという。実際に今回の災害後の調査ではダムは決壊しておらず、大量の土砂がダムにたまっていたという。ダムとしては一定の機能を果たし、被害の拡大は防ぐことが出来たのだが、土砂はダムの想定を超えたという結果となっている。

4年前の土砂災害の発生を受けて、県や国は県内74カ所で砂防ダムや治山ダムの建設などの対策を計画、今年5月までに66カ所が完成している。それと同時に、土砂災害の警戒区域等の指定もすすめられているが、大事な事は、これらの対策の内容をどれだけの人が知っているのかということだ。

早目の避難指示や避難勧告、ダムの建設などいわゆる「防災（防ぐ）」ということについては一定の対策がされていて、実際にその効果があったところもあると思う。

しかし、天気予報などでよく聞く「これまでに経験したことがない…」という言葉通り、今までの常識とは当てはまらないという考えを持つことがとても大事になるのではないと思う。いろい

平成 30 年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

ろな対策の基準はこれまで経験が基となっているため、これまでに経験したことのないことが発生すれば講じた対策だけでは厳しいという考えを持っておかないといけないと思う。

昨年の自由研究は、父に少し手伝ってもらったので、今回の災害のことについて話をしてみた。父は、「これからは『防災』ではなく災害から逃げる、避ける『避災』が大事だ」と言っていた。

想定できないことが現実に起こっているということを認識して、「防ぐ」だけでなく、「避難する」大切さというものを意識出来ればよいのではないかと思う。